

アジアの 蚕

第 4 号

2003年3月20日

題字 カット：宋 貴美子

編集・発行 アジア児童文学日本センター

2004年アジア児童文学大会への取り組み 始まる

第1回実行委員会を4月26日に——記念の展示やイベントも

本年8月中国の大連市で開催される第6回アジア児童文学大会につづき、第7回大会を名古屋市ならびに富山県大島町で開催すべく、わたしたちアジア児童文学日本センターはこれまで準備をすすめてきましたが、いよいよ大会への本格的な取り組みをはじめることになりました。すなわち関係機関のご協力を得て、この第7回大会を推進する母体としての大会実行委員会を発足させ、そこで大会のテーマ、日程、プログラム等の基本的事項について協議し、決定することとなります。さらにその決定にもとづき、8月の大連大会において第7回大会の日本での開催を宣言し、了承を得るというわけです。

その第1回実行委員会が4月26日午後1時半から名古屋市立東図書館で開催されることになりました。実行委員会のメンバーは名古屋市文化観光部長、名古屋市鶴舞中央図書館長、(財)名古屋市文化振興事業団事務局長、(財)大島町絵本文化振興財団理事長、(社)日本児童文学者協会国際部長、当センター会長(しかた・しん)および副会長(畑中圭一)の7名となっております。

なおこの実行委員会発足を記念して、「アジア子どもの本まつり “子どもの本からアジアを見る”」という催しを行ないます。すなわち展示「アジアの子どもの本」(4月23～28日、名古屋市民ギャラリー矢田)と、イベント「耳であじわうアジアの絵本ショー」(4月27日、名古屋市東文化小劇場)、「朗読とトークショー：いまアジアで読まれている宮沢賢治」(4月28日、同上)です。詳しい内容は2ページをご覧ください。

ボランティア募集中

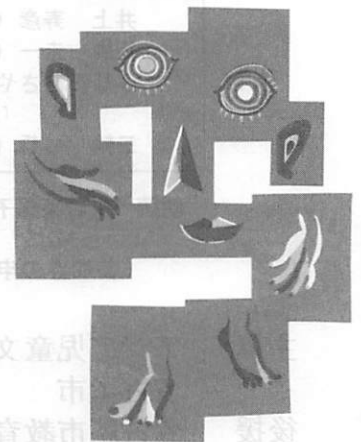
いまこの「アジア子どもの本まつり」に協力してくださるボランティアの方を募っております。仕事の内容は主として展示の受付や管理です。ご協力してくださる会員の方、協力者を推薦してくださる方、事務局の花井までFaxしてください。

<Fax番号 0568-91-6961>

大連大会に大挙40数名が参加

8月21日から25日まで中国大連市で開催される第6回アジア児童文学大会には、日本から40数名が参加することとなりました。3月5日現在で確認されているのは41名で、今後若干増える見込みです。この内これまでの大会に参加したことのある人は17名ですから、今回初めてという人の方が多く、また白百合女子大学の若手研究者が6名参加されるなど若い方が増えているのも頼もしいことです。

なお論文発表の希望者が多く、大会事務局は嬉しい悲鳴を挙げているようです。今後若干の調整があるかもしれません。なお今後、渡航関係のお世話は、東京(首都圏並びに東日本、北日本)、関西(中京および中国・四国地方を含む)、九州の3方面に分かれて行うこととなりますが詳しいことは個々にご連絡します。



アジア子どもの本まつり 子どもの本からアジアを見る

<2004年アジア児童文学大会実行委員会結成記念>

展示 アジアの子どもの本

とき 4月23日(火)～4月28日(日) 9:30～19:00 (28日は17時迄)

ところ 名古屋市民ギャラリー矢田 (地下鉄名城線「ナゴヤドーム前矢田」駅1番出口)

- ◆ 日本で紹介されたアジアの現代児童文学作品 (『モンシル姉さん』『わら屋根のある村』『こいぬのうんち』『ある15歳の死』など)
- ◆ 東アジアから南アジアまで、それぞれの国・言語の子どもの本 45点
- ◆ アジアを描いた日本の作品 (三木卓『滅びた国の旅』, しかた・しん『国境』, 乙骨淑子『びいちゃあしやん』, 堀内純子『ハルモニの風』など)
- ◆ 「野間国際絵本原画コンクール」入選絵本の原画パネル(韓国、マレーシアなど)
- ◆ 関係団体のブース (ユネスコ・アジア文化センター、大阪国際児童文学館など)

イベント ところ 名古屋市東文化小劇場ホール (「市民ギャラリー矢田」隣り)

◆ 4月27日(土) 13:30～15:00

耳であじわう アジアの絵本ショー 朗読：顯那 金永順

中国や韓国の絵本を、スクリーンで見ながら、それぞれの言語で読まれるのを味わいます。また、ポイントになる箇所は日本語で味わい直します。

コーディネーターの畑中圭一が、詩人・絵本研究家の立場からコメントしたり、翻訳者や研究者にインタビューしたりしながら、絵本の言葉のはたらきや絵本の楽しみ方についてまとめていきます。 《参加費 500円》

◆ 4月28日(日) 13:00～16:00

朗読とトークショー「いまアジアで読まれている宮澤賢治」

—文学・演劇・詩 それぞれの専門家がジャンルを越えてクロストーク！—

いま東アジアを中心に、宮澤賢治が静かなブームになりつつある。その現況を紹介しながら、なぜ、いま宮澤賢治なのか、中国、韓国、インドなどアジアの感性と賢治作品について語り合うトークショウと、賢治の詩の朗読。 《参加費 900円》

総合コーディネーター： しかた・しん (作家としてアジアに関わる作品が多い。各地の親子ミュージカルで、賢治作品を数多く演出。)

パネラー

井上 寿彦 (作家、賢治研究家、東海学園大学教授)

畑中 圭一 (詩人、8月大連でのアジア児童文学大会で賢治について研究発表)

ふじたあさや (日本演出者協会理事ほか、アジア各国でも舞台づくりに活躍。

「グスコブドリの伝記」を脚色演出)

三輪 哲 (評論家、子どもの本専門店メルヘンハウス店主)

朗読：中野菜保子 長谷川恵美子 舞台装飾：山口順翠 (石田流生花)

《参加券の申し込みは、ほんだ企画(Tel. 052-461-8992)まで》

主催 アジア児童文学日本センター (社) 日本児童文学者協会
名古屋市 (財) 名古屋市文化振興事業団
後援 名古屋市教育委員会

中国農村の小学校を描いた映画

河野孝之

中国児童文学を読む際、特に農村を舞台にした作品の場合、その背景として知っておくべきことに「希望工程」という言葉がある。「希望工程」、日本語訳としては希望プロジェクト、希望計画というもので、学校に行けない貧困地域、貧困家庭の子どもたちを支援するプロジェクトのこと。団体や個人の寄付によって奨学金や小学校の建設資金を援助するというものである。児童書専門出版社も本の寄贈などを通して協力している。

小学校教育という国家事業に対して、共産主義の国家なのに民間からの寄付に頼るといのが不思議に思ってしまうのだが、それが現実なのだ。

その現実を具体的に知るために映画『赤いコーラン』、『菊豆』などで世界的に知られている監督、張芸謀（チャン・イーモウ）による中国農村の小学校をめぐる映画を紹介したい。

『あの子を探して』（一個都不能少、1999年、ベネチア国際映画祭金獅子賞）、『初恋のきた道』（我的父親母親、2000年、ベルリン国際映画祭銀熊賞）という二本である。前者は映画の最後に「希望工程」について言及があり、「希望工程」宣伝映画というもので、中国国内の上映では、団体動員がはかられていたようだ。以前、CS衛星放送で中国映画興行ベスト3を紹介する番組があったのだが、『あの子を探して』は、だいたい各地区のベスト3に入っていたが、コメントで「この作品は団体動員があり、平日は稼働しているけれど、土日は振るわない」と言っていたように記憶している。

その時は、張芸謀たるものがお抱え映画を作ったりしてとっていたが、どうしてどうして実にしたかな映画になっていた。

物語は、とある山村の小学校。たった一人いる教師が、親の病気のためひと月村を離れることになる。代用教員として村長が連れてきたのは、近くの村の13歳の少女だった。僻地の村では、小学校を卒業しただけのこの少女以外にいなかったのだ。とほうにくれる教師。「なにができるのか」と試してみても歌ひとつ教えられそうもない。少女にしても村長から金を50元払うからと無理やり連れてこられただけに実に無愛想、無気力。結局、教科書を写すことはできそうなので、一ヶ月の間、黒板に教科書の内容を板書して生徒に書き取らせることにして、その分のチョークを置いていくことになる。この小学校には、チョーク一本でも貴重なのだ。しかし、実際は一年生から四年生の28人がひとつの教室にいるわけで、当然わからないと教室を逃げ出そうという生徒が出てきてしまう。少女はただ教室のドアの外

に座り込んで、生徒を教室に閉じ込めて出さないようにするだけという有様で、まったくやる気がない。

さて、『あの子を探して』の原題「一個都不能少」を直訳すると「ひとりでも少なくなつてはいけない」だ。これは、「今いる28人が、戻ってくるまでに一人でも欠けてはいけない。もし減らずに残っていたら追加報酬として、もう10元は私自身が出そう」と教師が言い残して村を離れたことからきている。しかしながら案の定、一人の男の子が親の借金のために突然、町に出稼ぎに行ってしまう。村長は「仕方がない。かまうな」というが、少女はともかくお金が惜しくてしょうがない。

そこで、子どもたちの応援を得て、探索資金をかきあつめることにする。実は、ここからまさに生きた授業になっていくというのが面白いところだ。町まで何時間かかるか、お金はいくらかかるか、アルバイトをすることでどれだけ働けばいいのかなど、やつぎばやに子どもたちに質問して、生き生きとそれに答える生徒たち。ようやく生徒たちに見送られて出発。悪戦苦闘して町まで行くが、肝心な「あの子」は町で行方不明になっていた。

主人公の少女をはじめとして、すべて素人の子どもたちだけにドキュメンタリーのような手法を使っているのが実に成功している。拝金主義的な傾向やお役所仕事の部分を押捺したりと、たつぷりと随所に皮肉をまきつつ最後は、子どもたちの笑顔でおわっているようにさわやかな感動作にもなっている。

もう一つの『初恋の来た道』もやはり『あの子を探して』と同じように田舎の小学校が出てくる。ただし、この作品は1950年代が主な舞台である。とある農村に都会から若い男の教師がやってくる。ようやくこの村にも小学校ができると喜ぶ村人たち。村人総出で若い教師を助けて、学校建築からはじめることになる。男達は教師と一緒に学校建設をおこない、女達は食事の世話をする。村の娘ツイイーはそんな教師ルオに一目惚れして果敢にアタックしていく。そしてルオもその思いに応えて相思相愛の仲になっていくのだが、突然ルオは、右派分子として捕らえられ町に連れ去られてしまう。村外れの道でいつまでも待ち続けるツイイー。中国山村の四季の移り変わりを背景に、人を恋うという気持ちを鮮烈に描いている。

それと同時にさらにとだが僻地の村の教育が、教師の個人的努力だけに負っているという現状をも訴えかけているのは『あの子を探して』と重なる部分である。そして『あの子を探して』と併せて観ると50年代から現在まで、ほとんど変化していない状況に愕然としてしまう。それだけに「希望工程」が必要なのだろう。

この二本の映画は、いずれもソニー・ピクチャーズからビデオとDVDで発売され、レンタルもされている。

忘れがたい台湾の旅

中 由美子

昨年の11月2日から4日まで、台湾南東部にある台東師範学院で、「華文世界児童文学学術研討会」が開催され、出席した。シンポジウムは、楊茂秀・哲学教授の「むかしむかしから永遠へ——文学の中の時間を論ず」という含蓄ある基調講演で幕を開け、林文寶児童文学研究所所長司会の総合座談会で幕を閉じるまで3日間（一日目は13:30—17:20、二日目は8:30—17:30、三日目は8:30—16:30）、23の論文発表と二つの座談会（「華文世界児童文学の未来」、「海峡兩岸三地の児童文学交流」）を含め、熱の入った討議が行われた。シンポジウムの詳しいことについては、「虹の通信」第30号（日中児童文学美術交流センター刊）をご覧ください。

今回のシンポジウム参加が決まった後、台湾の作家李潼さんと方素珍さん、香港の作家潘明珠さん、マレーシアの作家愛薇さんたちから、次々と電話やメールが入り、台湾滞在中の日程ができあがった。

10月30日（火）11:00、約束通り私は関空からキャセイ航空565便で台湾へ飛んだ。

予定より20分も早く、12時55分、桃園にある中正空港着。李潼さんや方素珍さんたちが迎えに来てくれた。先に着いていた潘明珠さんや愛薇さんとも再会。私たち遠来の四人は、李潼さん運転の車で山を越え、羅東へ向かった。途中、小雨が降り始め、彼の家に着いた夕方には、本降りになっていた。

女性四人、李潼さんの別宅(?)に泊めてもらい、その夜は彼の友人夫人の誕生パーティ。31日午前中は羅東運動公園や街中の本屋さんをぶらつき、午後は私と李潼さんは五結中学で（潘明珠さんや愛薇さんは別の学校で）、「日本の青少年文化」と題する講演、夜は李潼さんの家族と鍋を囲んでおしゃべり。『カバランの少年』の取材で訪れたときは、まだ就学前だった末っ子の以寛くんがもう5年生、以中くん、以誠くんも中学生、高校生で見上げるほどに背丈が伸びていて、時の流れを実感する。いつものことながら、李潼さん夫妻のさりげない心遣いには、感謝のほかない。

夕方から降り出した雨が一晩中降り続く。

11月1日（木）早朝、前夜同室の愛薇さんと遅くまでおしゃべりしていたのと、雨音が耳についてよく眠れなかったのと、まだ夢の中にいた私は、ぼんやりと電話の音を聞いた。だれかの足音、話し声……愛薇さんに揺り起こされて時計を見ると、まだ5時前。「6時出発じゃなかったの」とぶつぶついう私に、「雨が上がったから、早めに出て日の出を見よ

うって、李潼が」と愛薇さんは欣喜雀躍の態。

あたふたと顔を洗い、荷物を整理して、出発の準備ができたのが5時過ぎ。李潼さんの車に5人分の荷物を積みこみ、まずガソリンスタンドへ。満タンになるのを待つ間に、サービスのコーヒーで目を覚まし、5:28 羅東を出発。

街灯まだ消えやらぬ広い道をしばらく走り、「蘇花公路」の起点、蘇澳からかなりの急坂を登りつめたところ、

李潼さんは車を止めた。眼下に蘇澳港、その向こうに太平洋が広がっている。待つまもなく、薔薇色の光芒



「日の出」陳愷令さん 潘明珠さんと

の光芒が空を染め、海の彼方から太陽が姿をあらわした。ところがすぐに雲が流れてきて、時おり雲間から光芒が漏れるだけで、写真家の陳愷令さんは長いことカメラを構えていたが、日の出は撮れなかった。李潼さんが用意してくれたパンと果物（グアバ）の朝食をとったあと、私たちは海岸沿いの曲がりくねった高速道路を一路、台湾東部の名所太魯閣峡谷へ。

因みに、私たちが通った蘇花公路は、花蓮まで133キロのハイウェイだが、百数十年前、清の時代にまず87キロの狭い道が造られ、日清戦争後日本人によって拡幅、延長、1932年に119キロの自動車道となり、戦後の拡幅、延長を経て現在にいたっている。

蘇花公路と東西横貫公路の交わる太魯閣に着いたのは8時過ぎ。朝の清々しい空気の中で公園と周りを取り囲む山々の緑が鮮やかだった。国家公園として整備されており、数十年前に来たときとはすっかり印象が変わっていた。少数民族のショーは8時半からというので諦め、峡谷に沿って横貫公路を西へ向かう。まず、道路下になってしまった不動明王に手を合わせ旅の安全を祈る。左手山腹に、長春瀑布と道路建設工事の殉難者を祭る長春祠が見え、李潼さんの横貫公路建設を題材にした『中央山脈に兄をさがして』（「台湾の少年少女」シリーズの一冊）を思い出す。



太魯閣の燕子口で 李潼さんを囲み

燕子口を過ぎたあたりで、車がストップ。台風と地震で崩れた道路の工事中とかで片側通行。10時まで待ってやっと発車。曲がりくねった素掘りのトンネルが続く九曲洞を過ぎたところで下車。200メートルほどの歩行者専用道路を通って燕子口へ。私たち以外だれもいない。峡谷の幅がもっとも狭まっているこのあたりは、左右の絶壁の間が16メートルほどしかなく、見上げると眩暈を感じるほど。途中で、車を回して下から上がってきた李潼さんと合流。歩きながら、作品を書くに当たって取材したいろいろな話を聞く。布洛湾は、先日の台風で道が崩れていて行けず、花蓮へ向かう。

花蓮では、まず李潼さんの友人で県の文化局局長の黄女士を訪ね、石雕博物館を見学。国際石彫コンクール開催中で、日本からの展覧作品もあり、石なのに柔らかい布で包まれた感じの作品もあり、目を楽しませてもらった。お昼は黄女士の案内で、写真家がオーナーという日本風の民家を改装したレストラン「忍想起（思い出さずにはいられない）」へ。竹筒に入ったご飯など珍しい郷土料理と楽しいおしゃべりに満腹したところで黄女士と別れ、やはり李潼さんの友人で近郊に住むドキュメンタリー映画の監督赫格さん宅へ。携帯電話で連絡をとりながら、行きつ戻りつ道路表示を確かめながら行く。農道まで出迎えてくださった赫格さんについて、畑の中に建つ農家風の家へ。家の前では大きな木が煙を上げていた。それは、阿美族の歓迎の印だそう。住まいより大きいプレハブの書庫を見学した後、前庭で特製のコーヒーをご馳走になる。今年の台風はひどくて、赫格さんの家も水に漬かったそう。なのに家はほったらかしたまま、カメラを担いで山津波に襲われた付近の村々を駆け回ったとのこと。きっと鬼気迫

るものがあったのだろうが、目の前の赫格さんは優しい目をしたかわいい(?)方。楽しい語らいの後、私たちははいよいよ目的地の台東を目指した。

右手にはずっと濃い緑の中央山脈が連なり、その山容に台湾の美を再発見させられた。車の中では、助手席にすわっていた愛薇さんが李潼さんに代わって電話を受ける度にトンチンカンなことになり、笑い声が絶えなかった。おかげで居眠り運転もなく、ついに台東着。あたりはもう暗くなっている、道を尋ね尋ねて宿舍の教師会館に着いたのは6時40分。300キロの道を13時間かけてやっと辿りついたのだ。李潼さん、本当にお疲れ様でした。

教師会館のレストランでは、林文寶所長夫妻、児童文学研究所の游珮芸さん親子が待っていてくださった。

このあと3日間、熱のこもったシンポジウムが展開され、5日(月)朝

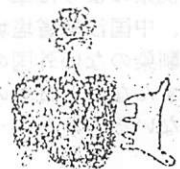


レストラン「忍想起」の前で

9:30の飛行機で台北へ。

台北では、方素珍さんの案内で、愛薇さんと共に幼獅(出版社)の優秀な女性編集長孫小英さんを訪ね、昼食を取りながら久闊を叙す。夕方、優れた絵本を編集しつづけている、信誼基金会出版部の女性編集長高明美さんが迎えに来て、夜遅くまでこもも話をした。翌朝、出勤する彼女について行き、編集部、地下の「親子館」、一階の販売店などを見学。午後、彼女に空港まで送ってもらい、4:10の飛行機で関空へ。

実に充実した、忘れがたい旅だった。これはみんな、李潼さんをはじめとする台湾の友人たちのおかげ。皆さんに心からの感謝を表したい。



よあけまで

曹文軒作 中由美子訳 和歌山静子絵
童心社刊 1300円

成 實 朋 子

「ばあは、死んでしまった。ターヤとシャオヤふたりのまごをおいて。そのときがきたからなのか、それともはたらきすぎたのか、ばあはいっきにふかいねむりにおち、ベッドから、だらんと手をほうりだした。」ドキリとさせられる書き出しである。祖母を亡くした十二のターヤと八つのシャオヤは、他に身内がないため、二人でお通夜をすることになる。動かない祖母の側に腰掛けながら、二人はばあの思い出にふける。楽しかったこと、困らせたこと、ばあの歌ってくれた子守歌…。祖母の死という難しいテーマであるが、和歌山氏のほのぼのとした絵柄ともあいまって、心に沁みる一冊となった。

原題は「守夜」。「ばあのお通夜」として1999年に「虹の図書室」第11号（日中児童文学美術交流センター）に発表され、好評を博したものを絵本化したものである。子ども向けの作品で死を扱ったものは無いわけではないが、この作品のように死そのものを真っ正面からとらえ、お通夜を舞台にした作品はまだ珍しいと言えるだろう。子どもにお通夜やお葬式を扱った作品はちょっと…、と思われるむきもあるかもしれないが、子どもにとって身内の死は非常に大きな影響があるものである。私は今でも七歳の時に参加した祖父の葬式のことを克明に覚えている。死んでいる祖父をどうとらえて良いのかとまどい、恐れ、そして祖父の事を思い出して涙ぐんだものであった。お通夜や葬式といった儀式を通じて、子どもなりに死というものを受け入れていったことを今更ながらに思い出した。

ターヤとシャオヤも最後に見よう見まねで二人きりの葬式をする。アシ笛を吹き、色とりどりの紙を切ってばらまき、紙はまるで花のようにばあの身体の上にちらばる…。ばらまかれる赤やピンク、金の紙は、ばあの死を二人の子どもが受け入れた証であるが、視覚的にも効果的で、読み手の心の中にも紙が吹き込んでくるような思いがし、裏表紙でやわらかにほほえむ生前のばあの姿は、遺影のように心に残る。祝祭のように華やかな葬式は、作者曹文軒氏の出身、中国江蘇省塩城のやり方であろうと思われるが、馴染のない外国の作品であるからこそ、違和感なくすんなりと日本の子どもにも受け入れられるのではないだろうか。

仲村修さんからのお知らせ

第1回韓国朝鮮児童文学セミナー

このたび、神戸で活動しているオリニの会主催で児童文学セミナーを開催します。このセミナーは実質的には、韓国・朝鮮児童文学会的な役割をはたすことをめざしています。ミニ発表（20分）へのご参加も歓迎します。なお遠方の場合、レポートのみ（主催者側代読）による参加も可能です。韓国からも何人か参加してくれそうです。関心のある方々のご参加を呼びかけます。

- ◇日時 2002年4月6日(土) 10:00～17:00
- ◇会場 神戸学生青年センター
(阪急「六甲」駅、北東に徒歩2分)
- ◇参加費 1000円（レポート参加は600円）
当日、受付でいただきます。
- ◇申込み締切 3月15日（一般参加は当日でも可）
- ◇主催 オリニの会
(運営協力：オリニほんやく会)

◇プログラム

- 10:00 ミニ発表（各20分）1～4
- 11:30 ビデオ「K&J Kids ワールドカップで歌いたい」日韓児童合同の童謡合唱団
- 13:30 講演「韓国児童文学と日本と在日と」
仲村修
- 14:30 ミニ発表 5・6
- 15:30 ミニ発表 7・8、レポート代読1～4

◇ミニ発表・レポートの内容

作家・作品の紹介や研究（絵本を含む）、児童詩・短編童話・短編少年小説の翻訳朗読、読書指導の報告、子どもの感想文報告、読書（文庫）運動から、図書館司書の立場から、伝承童謡・創作童謡の独唱（CD鑑賞）、文学史研究、児童文化の立場から、韓国・朝鮮を描く日本の作家・作品、作家訪問記、その他。（万一発表希望者がふえた場合は、主宰者側で選考します。）

発表くださる場合はのちほど要旨等ご用意下さい。

- ◇申込 はがき・電話・Fax・Eメール等で発表希望の有無（ある場合は題目）、懇親会参加の有無も含めてセミナー事務局仲村修まで。
- ◇申込先 〒662-0857 西宮市中前田町8-28（自宅）Tel&Fax 0798-33-9433
E-mail eorini@h5.dion.ne.jp

* 出店あり：日本の創作作品、ハングル絵本・創作作品、目録、資料等多数。

* 懇親会：近くの「平衛六」で。18:00～20:30
会費2500円

花井都茂子さんから

モンゴルで活躍の稲田善樹さんのこと

児童文学者協会事務局長の藤田さんの紹介で、稲田善樹さんという方からお電話がありました。

稲田さんは定年退職後、絵を描くため、各国を旅していらっしやるそうですが、1997年から98年にかけてモンゴルを訪ねたとき、図書館でモンゴル語の『龍の子太郎』に出会ったそうです。ロシア語からモンゴル語に訳された、いわゆる海賊版だったとか。『龍の子太郎』があった棚はモンゴルの子どもたちの間でも人気のある本が置いてあると、図書館の方のお話だったそうです。帰国後松谷さんに会われてお知らせしたら、海賊版ですね、とおっしゃりつつも、モンゴルの子どもたちに読まれていることをとても喜んでくださったそうです。そこで稲田さんはモンゴルの子どもたちにメッセージをとお願ひしたところ、快く引き受けてくださり、それをモンゴルに届けたらとても喜んでもらえたとか。それからしばらくして、モンゴル語の『ちいさいモモちゃん』が正式出版の運びになったそうです。

そんなこんなでモンゴルの児童文学の代表者であるダシ・ドンドクさんとも知り合いになられて、モンゴルのことがあまり世界で知られていないので何とかしたい、とりわけモンゴルでは日本に対する関心が高い（ソ連崩壊後、小学校の語学選択科目がロシア語から日本語に変わったそうですよ。ですから、現在の選択科目は英語と日本語ということです。）ので、日本の児童文学界との橋渡しのようなものができたらと思っていらしたとか。困難な中で頑張っているモンゴルの児童文学者にエールを送ってもらえたら、ともおっしゃってました。

交流といっても急にはなんともなりませんので、とりあえず大連大会のお知らせを稲田さん宛にお送りして、稲田さんからダシさんにコンタクトしてもらうことにしました。参加のご意志があるなら、直接ダシさんから中国に連絡していただくのがよいと思います。経済的な理由で日本には来られないけれど、中国なら可能だとおっしゃってましたので、日本からも30名あまり参加しますとお伝えしました。

稲田さんは主に農業指導を世話してらっしやるそうです。ツダノリコさんという文学方面での翻訳の協力者もいらっしやるそうです。また稲田さんのグループは、図書館が整備されていないモンゴルでの移動図書館の援助もなさっているとか。なおダシさんは民話採集のほか、各地を回って語り聞かせをしたり、モンゴルでも盛んな人形芝居も手掛けてらっしやるそうです。

稲田さんの連絡先

〒206-0811 東京都稲城市押立565 稲田善樹

TEL. 042-377-1390

再び 花井さんから

“アジアとの出会い”

ほんのお手伝いのつもりで会員になったものの、ひよんなことから事務局長なるものを引き受けてしまっ、ちよつとまずかったかなと思いつつ、“えい、ままよ”と走り出してしまっ、今日に至っている。

そもそも家業(真田紐)の関係で東アジアの文化、中でも高麗、李朝に関心が深かった。高麗茶碗は名品である。茶碗や甗を包む仕履には、間道・更紗など異国情緒たっぷりの名物裂が珍重された。こんなに憧れを持って仰ぎ見た時代もあったのに、と思うことしきり…。今もベトナムの安南紋様は、作家の作陶意欲を刺激しつつづけている。1997年に茶道資料館で開かれたメドブ、ノリゲの展示は日本の結びとの関連を感じさせてくれた。そして今、ワールドカップのおかげでやっとお隣の国との交流も進み始め、共同制作のドラマもできた。若い人たちの間ではブームとなっている。

なのに、なのに…。ちまたの本屋さんで韓国その他アジアの絵本を見ることは稀である。絵本では無論絵がものを言うから、日本の画家が描いたものはやはり私には物足りない。昨秋京都の高麗美術館で限定公開された、李朝廟堂図はすばらしかった。私たちが当然のこととして教育されてきた西洋絵画技法の遠近法とは、全く違った手法による世界が展開されていた。この図と通底するように思える1冊の絵本がある。ご存知の方も多いと思うが、イ・ヨンギョンの「あかてぬぐいのおくさんと7にんのなかま」(かみや ふじ やく、福音館書店)だ。「マンヒのいえ」や「ソリちゃんのチュソク」などまだまだ風俗習慣を紹介するような絵本が多勢を占めているようだが、それでも隔世の感がある。

各地の少数民族への興味から始まって、ケルトにたどりつき、そして焼き物、メドブ、ノリゲに出会い、また絵本に戻った。私の新たな絵本行脚はやっ、と今始まったばかりだと言ひ聞かせつつ、せつせと事務作業にいそしんでいる。

INFORMATION

まゆ 第85号(2002年1月20日)

この『アジアの風』創刊号に「玉清を読む」というエッセイを書いた笠原肇さんが、その玉清の「画眉」の翻訳を發表している。題して「眉をひく」。教師と女生徒との恋愛を取り上げているが、かなり抑制のきいた表現の故か、じっくりと読みあじわうことのできる作品である。

《連絡先》 室蘭市八丁平4-25-25

童房舎 笠原肇

キワニス文庫をご存知ですか

大阪府立国際児童文学館にある「キワニス文庫」というコレクションをご存知でしょうか？

地域文化の振興などさまざまな社会活動に携わってきた「大阪キワニス・クラブ」が、1982年、設立15周年記念事業として、国際児童文学館に対し、アジア各国の子どもの本蒐集のための資金援助を行ないました。児童文学館が開館する2年前のことです。それから10余年、資金援助が続けられ、約7000点の資料(図書)が蒐集されました。このコレクションが「キワニス文庫」です。

収められている資料の言語は、25に及んでいます。現在の言語別の資料数は、表に示した通りです。なおこの表には「キワニス文庫」以外の資料(国際児童文学館独自の予算で購入したもの)も含まれています。

なおこれらの資料は、国際児童文学館の閲覧室で閲覧することができます。館外貸出しはできません。詳しいことは

大阪府立国際児童文学館へ
吹田市千里万博公園10-6
Tel. 06-6876-8800

言語	総点数	(内絵本冊数)
中国語	3792	(1130)
蒙古語	8	(0)
朝鮮語	3191	(332)
タイ語	305	(241)
ヴェトナム語	14	(9)
ヒンディー語	503	(127)
パンジャビ語	39	(2)
クジャラティー語	29	(9)
ネパール語	38	(7)
マラーティー語	121	(20)
ベンガル語	127	(43)
オーリア語	30	(3)
アッサム語	4	(0)
ウルドゥー語	89	(19)
シンディー語	17	(0)
タミール語	90	(13)
カンナダ語	47	(5)
マラヤーラム語	71	(23)
テルグー語	69	(17)
シンハラ語	19	(6)
マライ語	1111	(453)
ジャワ語	1	(1)
スンダ語	2	(2)
タガログ語	63	(60)
マオリ語	2	(2)

小耳情報

韓日共同主催特別展

2002年ソウルスタイル

《李さん一家の素顔の暮らし》

3月21日～7月16日

国立民族学博物館

(吹田市千里万博公園)

李さん一家の持ち物全部をそっくり(三千数百点)並べて見せるというユニークな展示。現在の韓国の人々の日常生活に触れてみませんか。

この展示に併せてフォーラム、みんなくゼミナール(3回)などさまざまな催しも行なわれます。

休館日は毎週水曜日。

観覧料：一般830円 高校・大学生450円

小・中学生250円

問合せ：Tel. 06-6876-2151

グループ紹介

チェリタ・ラギの部屋

マレーシアの民話や子どもの読み物、絵本などの紹介に取り組む、女性二人だけのグループです。チェリタ(cerita)はマレー語で「お話」、ラギ(lagi)は「もっと」という意味です。拠点は大阪府の交野市。お二人ともマレーシアに数年間住んでおられた時に、マレー語に魅せられたのが、この活動に入ったきっかけだそうです。現在はインターネットのホームページでお話を紹介するのが主な活動です。興味のある方は一度サイトを開いてみてください。

<http://www.joy.hi-ho.ne.jp/cerita/>

あとがき

畑中圭一

◇これまで暢気にかまえていたわけではないのですが、第7回アジア児童文学大会(2004年)の実行委員会が発足するという事になって、にわかに緊張感が高まってきました。大会の準備や運営についての課題がいろいろと浮かんできて、心穏やかならぬ昨今です。

◇この号も中さん、河野さんをはじめ会員の方々のご協力によって読み応えのある内容になりました。皆さんの交流・情報交換の場としてより充実したものにしていきたいと思しますので、ご協力ください。

◇情報は e-mail で送って下さっても結構です。E-mail: hatanaka-kidu@par.odn.ne.jp

□